高校生留学のパイオニア
AFS Intercultural Programs
http://www.afs.or.jp/

AFS NEWS

2004 Autumn
エイ・エフ・エス ニュース
No.119

発行人　財団法人エイ・エフ・エス日本協会
事務局長　大山 守雄
編集長　50周年記念事業委員会広報部会
嶋田みどり
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-16 2F
☎03-3357-5831 FAX 03-3357-5841
E-mail info@afs.or.jp

50 ★Anniversary★ AFS JAPAN Lifetime Experience

AFS日本協会50周年 記念号

留学生たちの半世紀
ボランティアが育んだ国際交流の歴史
世界に広がるネットワーク

AFSの現場から－日本各地の支部活動
私のAFS体験

6月4日、大分県内の高校に通う留学生たちが地元の小学生と一緒に田植えをしました。いまや恒例行事となっていて、今年で7年目。途中から泥合戦になってごらんのとおり。秋には稲刈りもします。左からボリビア、ドイツ、ニュージーランド、ノルウェー、ラオス、フィリピンからの留学生（写真提供:大分支部）

理想の世界を追い求めて

AFS国際本部理事長
ビクトール・オポルト
Victor Oporto

人の命を救うため、AFSの救急車がはじめて戦地を走り抜けたのが90年前のことです。AFS留学に挑戦した初の日本人高校生が海を渡った日から数えると、50年の月日が経ちました。

今も昔も、遠い異国の地に降り立つ日本の若者たちは、日本の代表です。彼らの経験を通じてみなさんも異文化を知り、互いに理解しあうのです。同様に、日本に来た留学生もまた、心から暖かく迎え入れられてきました。

AFSに献身的に関わっていると、いく度となく尋ねられたことがあるでしょう。「なぜAFSの活動をつづけるのか」と。この問いに対する答えも、何通りも思いつくに違いありません。世界中にいるAFSファミリーの誰もが心に抱く思いは、平和の実現を目指して日々不寛容と戦っているということ。ときには、差別に立ちはだかる壁を築く建築士のように。またあるときには、暴力がはびこる現代社会で隠れた理想の世界を追い求め、捕らえて放さない狩人のように。私たちは、理想のために、立ちあがります。ボランティア――その言葉の奥には、「私たちは変化をもたらすことができる」という意味がこめられているのです。

10月、50周年を迎える日本に世界のAFSファミリーが集い、過去の歴史を称えるとともに、今後のAFSについて考えます。日本のみなさんは、AFSの活動にとってかけがえのない存在です。これまでの多大なる貢献に、心から感謝の言葉を贈りたいと思います。

（訳：原賀真紀子）

留学生交流を通じて国際的人材の育成を

AFS日本協会理事長
垂水（たるみず） 公正（きみまさ）

最近の国際社会にみられる大きな流れのひとつに、グローバリゼーションがあります。もちろん、グローバリゼーション自体にも光と影がありますが、わが国は世界を取り巻いているこの大きな流れに乗っていかなければ、国際社会のなかで取り残されてしまいます。

グローバル化が進行する国際経済・社会のなかで、国際交流の重要性はますます高まっています。わが国と諸外国との相互理解を増進し、友好関係を強化するうえで、留学を通じての人的ネットワークの果たす役割が予想を越えて大きいことは、疑いの余地はありません。そして、若い世代を代表する高校生の留学体験が、その増進にきわめて大きく寄与するものと考えています。

今年、2004年は、AFS日本協会の活動が50周年を迎えるという大きな節目の年にあたります。私どもは、過ぎ去った50年を反省して、これからの50年をしっかりと展望し、多様性が増すなかで、国際交流をさらに推進強化することにより、次世代を担う国際的人材の育成につとめ、平和な世界の実現をめざす努力の一翼を担いたいと考えております。

これまでの50年の間にAFS日本協会の活動を温かくご支援くださった協会関係者、ホストスクール・ホストファミリーのみなさま、帰国生各位に対し、深甚なる感謝の意を表するとともに、今後とも変わらぬご協力を賜りますようお願いいたします。

AFS救急車ドライバーを迎え、ニューヨークで50周年のつどい

AFS日本協会50周年を祝い、6月30日、ニューヨークの関係者が集まりました。当日はAFSの創始者といえるAmerican Field Serviceの救急車ドライバーだったエド・マスバックさん、ワード・チェンバレンさん、1950年代に日本人留学生のシャペロンをされたブレイキー・ワースさん、そしてAFS国際本部会長やスタッフのみなさんをゲストに迎え、さまざまな世代の男女17人の帰国生が集まり盛大な会となりました。帰国生同士、それぞれが異文化のなかで国際人として活躍している姿に触れ、はじめて留学したときのチャレンジ精神を思い出しました。また、AFS国際本部のみなさんや創立当時のドライバーの方たちの経験を聞き、世界の人々が人種や文化、宗教の違いを超えて理解を深めていくためにわれわれAFS関係者の貢献が必要であることを、あらためて心にきざみました。（上西 英雄）

留学生たちの半世紀

終戦後まもない1954年、日本で最初のAFS生がアメリカへ派遣されました。それから50年、時代は変わり、高校生気質は変わっても、異文化のなかで生活する経験はAFS精神を確実にはぐくんできました。

第1期生は氷川丸で横浜を出発、2週間の船旅で太平洋を渡り、アメリカへと向かいました。高校生の海外留学など夢のような時代、100倍の競争を勝ち抜いてAFS国際奨学金(当時の呼び名)を得た8人。船内のロビーで

©AFS Intercultural Programs, Inc.

旅立ちは留学生活の第一歩。これからどんな一年になるのだろう？出発時の期待と不安と興奮はいつも変わらないようです。

はじめて飛行機で渡米したのは第4期生(1957-58)。飛行機に乗ること自体がまだめずらしかったころ。東京国際空港で搭乗機をバックに出発の記念撮影

©AFS Intercultural Programs, Inc.

だれもが休暇で海外旅行する昨今、それでも留学となるとちょっと違います。2000年8月、成田空港で出発直前のアメリカ派遣生たち

AFS JAPAN
1954-2004

50's

日本人留学生カズオをまじえたシューバー家のファミリー・フォト。「1959年10月」とあります

©AFS Intercultural Programs, Inc.

はじめてアメリカから日本へ9人の高校生がやってきたのは1957年。夏期だけの短期滞在でしたが、留学生受け入れのスタートでした。ホストファミリーと駅での別れ

©AFS Intercultural Programs, Inc.

このころは、人びとの暮らしのなかに古き良き日本、古き良きアメリカが残っていました。

60's

©AFS Intercultural Programs, Inc.

このころ、世界各国から来た留学生たちは１年の最後にワシントンに集まり、ホワイトハウスに招かれて大統領のスピーチを聞くのが恒例でした。このときの大統領ケネディは1963年11月に暗殺されます（1961・夏）

地方の小都市では留学生はまだめずらしかったのでしょうか。スーパーの看板の上に大きな歓迎のサイン（1965・夏、ニューヨーク州サラマンカ）

©AFS Intercultural Programs, Inc.

キューバ危機、ケネディ暗殺、ベトナム戦争激化、カウンターカルチャーと、世界はひとつの激動の時代でした。

AFS JAPAN
1954-2004

70's

©AFS Intercultural Programs, Inc.

喜び、悲しみ、苦労、失敗……。いろいろなことがあった1年の終わりに訪れる別れのとき。残るのは友情……(1970・夏)

1年間の最後には、同じ地域に来ていた世界各国の留学生たちが集まってバス旅行。国際交流パッケージツアーともいえる恒例行事です(1979・夏)

ライフスタイルが一変したかのように、服装も、行動も、精神も自由になったような気がした70年代……。

1976年はアメリカ建国200周年。さまざまな記念行事が企画され、75年秋、オハイオ州コニアットの町にも200周年記念列車がやってきました

80's~

同じ地域のAFS生たちが集まって数日間のキャンプ。留学生同志の交流も楽しく、忘れがたい、貴重な経験です。浴衣以外の２人はマレーシアから(1985、ニュージーランド)

日本から南米エクアドルへ。現地のボランティアが企画してくれたジャングル旅行は大満足の得がたい経験(1992-93)

1970年代に始まったマルチナショナル・プログラムで、日本から世界各国へ留学生が派遣され、また世界各国から日本へ留学生が来るようになりました。

フィンランドから来たトーマス・アイットマキー君(1996-97)は留学中に弓道の初段を取り、その後、2回の日本への里帰り中も毎日道場に通ったそうです

フィンランドからの元留学生ミンナ・オリカイネンさん(2001-02)が、2004年にAFS JapanのTシャツを着て留学先の大分に里帰りしました。Tシャツは、約30年前に父親がAFS生としてアメリカに留学中、日本の留学生からもらった思い出の品。親子２代にわたる日本との結びつきです

マレーシアから三重県に来たクー・シェン・リャン君(2002-03)のホストファミリーは農家でした。お父さんを手伝ってコンバインで稲刈りも体験

サウナから出たら、腰にタオル一枚巻いただけでサイクリングへ……。これがスウェーデン方式？(1995-96)

写真提供：AFS国際本部　(財)エイ・エフ・エス日本協会　野口修氏　杉野廣一氏　高河美智子氏　堀田厚葉氏

AFSボランティアが育んだ国際交流の歴史

AFSのF（Field）は“戦場”のこと。二つの大戦中、傷病兵を輸送する奉仕活動に始まったAFSは、戦争のない平和な世界をめざし、若者の国際的な相互理解を深める活動へと発展しました。

AFS国際本部の歴史

AFS国際本部は、ニューヨークを拠点に世界50数カ国にネットワークを持つ組織です。AFSの交換留学制度が発足した1947年以来、この国際プログラムに参加した高校生の数は30万人を超えています。

野戦奉仕から国際交流支援へ

American Field Service（アメリカ野戦奉仕団）の頭文字に由来するAFSという名称そのものが、まさにこの組織の歴史を象徴するものです。1914年、第一次大戦が勃発したとき、パリにいたアメリカ青年たちが、戦場から後方の病院へ傷病兵を輸送する活動を始めたのがその発端でした。その後、第二次世界大戦時にこの奉仕活動は再開され、ヨーロッパ、北アフリカ、中東、インド、ビルマなどでAFSの若いボランティアが救護輸送活動に携わりました。彼らは軍隊のかたわらで輸送車を運転し、担架で傷病兵を運び、120万人以上の傷病兵の救援に尽力しました。またナチの強制収容所解放にも約70名のAFSのボランティアが協力しています。

２回の大戦を経験したボランティアたちは、その経験と自分たちの活動をとおして、お互いの違いを認めあい、尊重しあうことがいかに大事であるかに気づきました。悲惨な戦争の結果である傷病兵の救助活動という後ろ向きな仕事よりも、「戦争を起こさない」という前向きな仕事に取り組む決意をし、若者の留学制度を始めようという結論にいたりました。

留学制度のグローバルな展開

そして、1947年には世界11カ国から52人の若者がアメリカに派遣されました。ここに世界各国の高校生が、アメリカで１年間の留学体験をする機会を提供するプログラムが生まれたのです。1950年にはアメリカの生徒が海外で夏休みを過ごすサマープログラムが始まり、1957年には、１年間を世界各国の家庭で過ごすイヤープログラムも始まりました。AFSの発展にともない、1976年には世界各国からアメリカに留学するAFS生の数が5万人を超え、1983年にはアメリカから海外に留学する生徒数が5万人を超えました。同時に、1971年には、アメリカ以外の各国間での交換留学制度（マルチナショナルプログラム）が発足し、世界50カ国以上の国々で異なる文化を体験する現在のようなプログラムに成長しました。

傷病兵を救援するAFSのボランティアドライバーが始めた交換プログラムが、世界中で、個人と家庭、学校、地域社会、ひいては国を結びつけるユニークで強力な体験を提供する国際交流のリーダーとなっていったのです。

©AFS Intercultural Programs, Inc.

AFS創始者の一人、スティーブン・ガラッティ氏。第二次大戦中、イタリアで救急車ドライバーをしていたころ。同氏は1938年から64年までAFS国際本部の理事長として活動した

©AFS Intercultural Programs, Inc.

第一次大戦中、ずらりと並んだAmerican Field Service救急車。1917年、パリで

©AFS Intercultural Programs, Inc.

負傷兵を搬送するAFSボランティア。第二次大戦中、イタリアで

AFS日本協会の歴史

日本のAFSの歴史は、1954年、日本人高校生8名が横浜から氷川丸でアメリカに向けて出航したところから始まります。1年間の留学を終えて帰国した彼らは、翌1955年に、AFS日本支部を立ち上げ、2年後の1957年にはアメリカから9名のサマープログラムの高校生をはじめて受け入れました。そして1963年には日本の高校に１年間通うイヤープログラムも始まりました。現在では、日本と各国の間の交流人数（派遣および受け入れ）が2万数千人にのぼるまでに発展を遂げました。

日本における高校生交換留学制度の確立

当初は日本とアメリカの間のみの交換でしたが、日本でも1972年に、ノルウェーからはじめて生徒を受け入れ、さらに翌年には、日本からアメリカ以外の国への派遣が実現しました。アジアの国々との交流では、中国やASEAN諸国との高校生の交流にくわえ、中国人の日本語教師プログラムなど、多彩な活動を展開するにいたっています。現在では、年間40以上の国・地域から400人近い高校生を受け入れ、派遣生は500人以上にのぼっています。

AFS国際本部は日本からはじめて留学生を受け入れるにあたり、文部省（当時）の協力を得てアメリカへ派遣する学生の選考を行なっていました。その後、1980年には文部省から財団法人としての認可を受け、選考もAFS日本協会が行なうようになりました。

AFSの活動を支えるボランティア

AFSの活動を支えるのは、ボランティアです。はじめは帰国生が中心となっていましたが、AFSの活動に参加する人たちが広がっていくなかで、受け入れを経験した一般の社会人や学生たちも重要な役割を担うようになりました。現在では、全国で1,000人以上のボランティアが活躍しており、その活動を日本各地にある67の支部および4地域事務所が支えています。

この50年間で、海外に派遣された日本人学生は１万数千人をかぞえます。留学後の進路も多彩で、政界、官界、医学界、法曹界、教育界、経済界、国際機関、NPO・NGO関係、マスコミ、芸能界など多岐にわたります。AFSの真の目的である「相互理解による世界平和の精神」を担って、各界で多くの帰国生が活躍していることは、AFS日本協会50年の大きな財産でもあります。

©AFS Intercultural Programs, Inc.

1963年ごろのAFS日本協会事務所で、当時の事務局長、矢作恒雄氏。そのころ事務所は銀座にあった

次の50年へ向けて

50周年を迎えたAFS日本協会は、多年にわたる国際交流への貢献が認められ、2004年６月、文部科学省より「国際交流功労者文部科学大臣表彰」を受けました。AFSの原点である「相互理解の推進による世界平和の達成」に立ち返り、さまざまな課題に取り組んでいきます。派遣・受け入れの国や地域については、アジア諸国やアフリカ、イスラム圏、旧共産圏などとの新たな交流、留学生の費用負担の面では、奨学金の拡充、また、受け入れ体制の面では、受け入れ家庭不足の解消などがあります。若い人たちの関心が多様化するなか、AFS活動に興味をもってもらえるための働きかけがさらに必要です。真の世界平和の実現に向けて、この50周年は新たなスタートの年になるでしょう。

AFSニュースレターは1960年代末までガリ版刷り。写真は59年10月発行

AFS世界会議が日本で開催されます

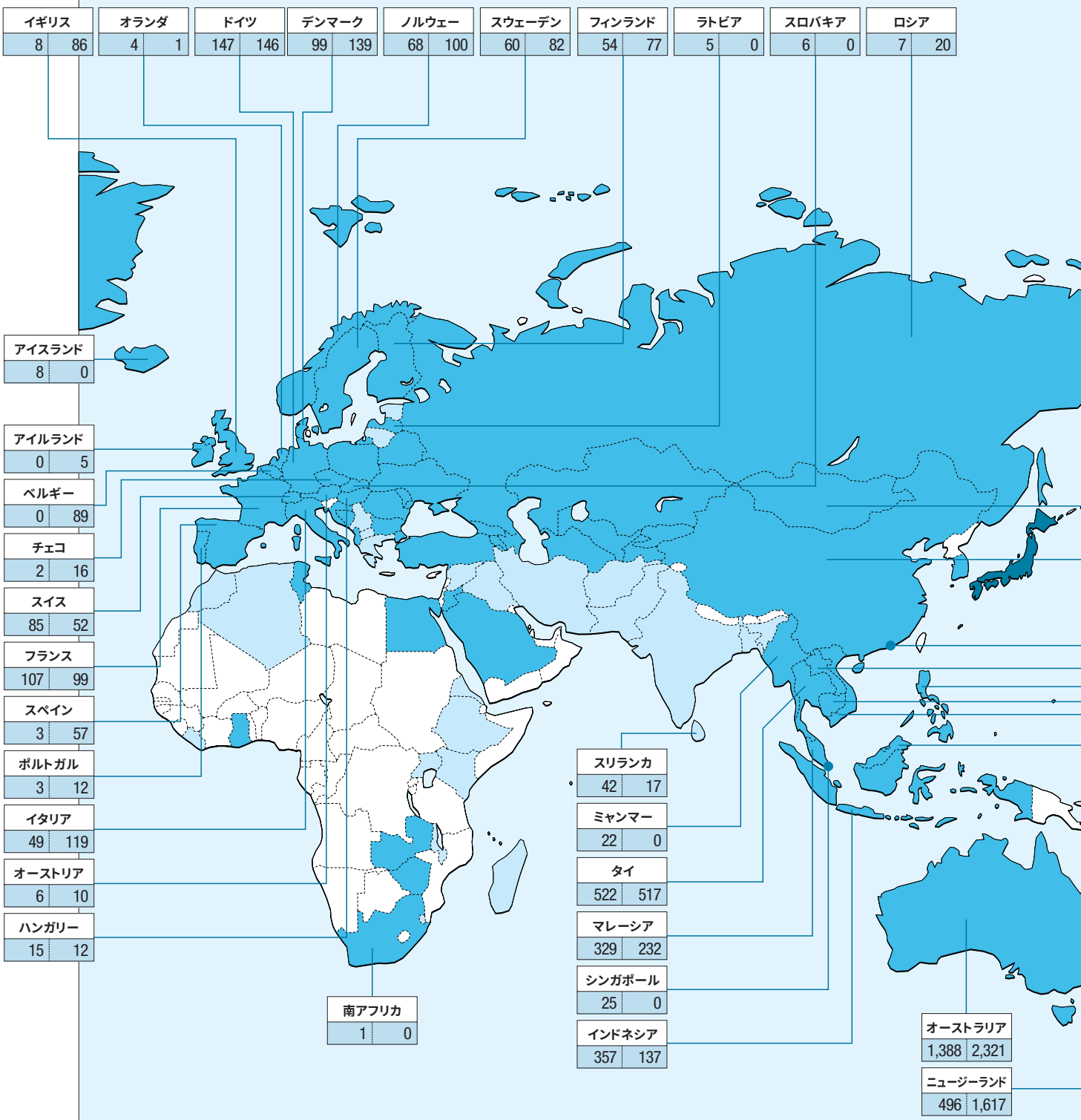
10月4日（月）から8日（金）までの5日間、日本ではじめてのAFS世界会議が山梨県の富士吉田市で開催されます。AFS世界会議は3年に1度開催され、AFS全体の今後の方向性が話し合われます。世界49のパートナー国からスタッフとボランティア約200人が参加する予定で、世界中のAFS関係者が一同につどう場です。

10月10日（日）のAFS日本協会50周年記念式典には、世界会議参加者の大半が参加する予定です。参加者の多くははじめての来日で、希望者はホームステイすることもでき、疑似AFS体験をする機会が得られるでしょう。

世界会議は、AFSのネットワークに携わる人に日本を、日本におけるAFSの活動を、そしてボランティアの人々の熱意を知ってもらう絶好の機会です。できるだけ多くのボランティアの方々が、50周年記念式典で、あるいは世界会議の会場で、世界各地から集まったAFS関係者と友好を深め、AFS活動の原点を確認していただきたいと思います。

いま、世界のAFSが日本に注目しています。

（高田 祐三　世界会議実行委員会委員長）

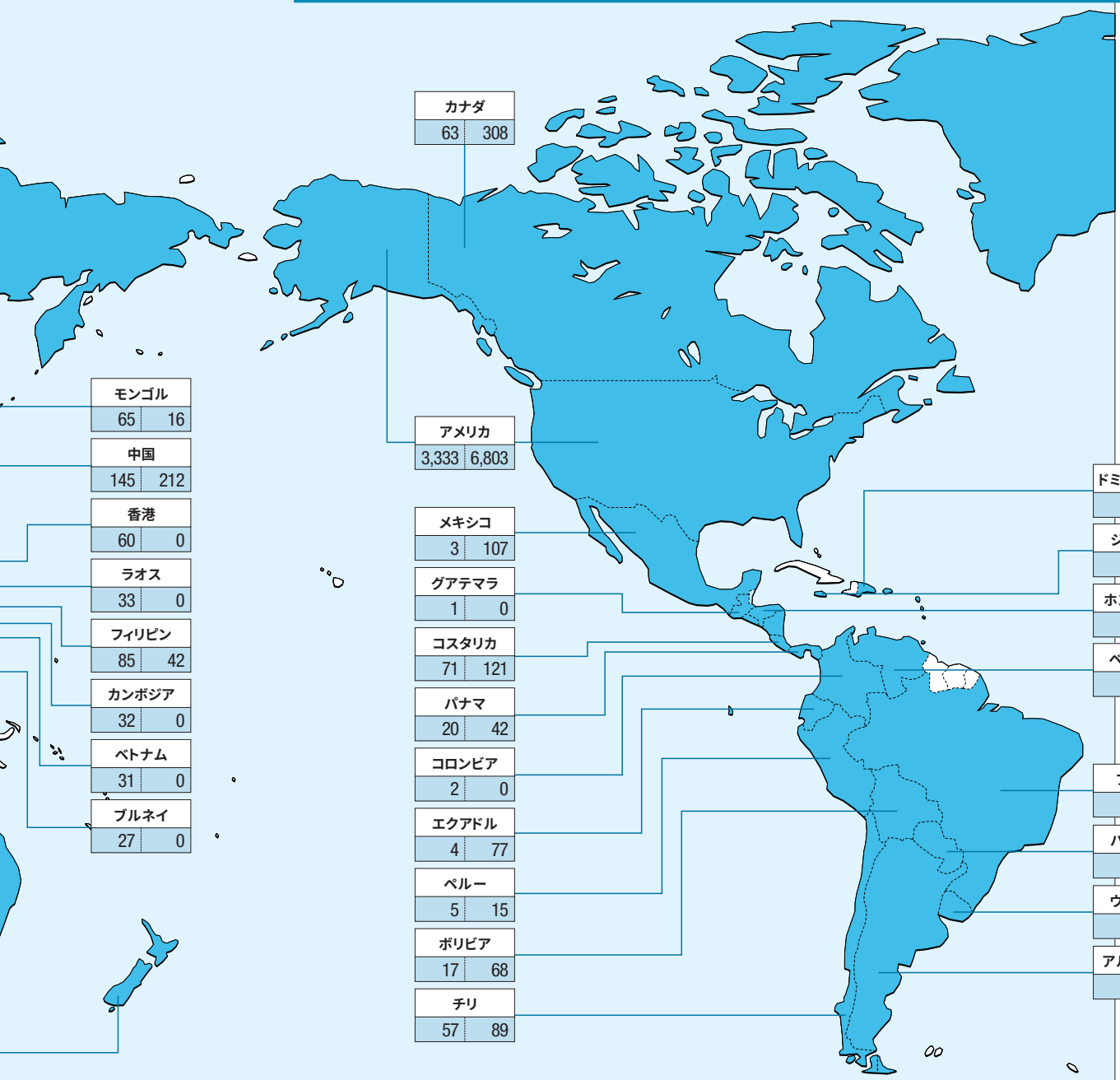


＞ AFS のロゴも時代とともに変わってきました

1947-1968 ＞ 1969-1972 ＞ 1972-1975 ＞ 1976-1987 ＞ 1987-1997 ＞ 現在

世界に広がるネットワーク

現在、地球上の86の国・地域が、独自のAFS組織または活動拠点を設けて、留学生の交流を行ない、AFSネットワークに参加しています。かつては活動していたけれども、現在は活動を停止している国々のなかには、内戦などで政情不安に苦しむ国もあります。日本はこれまで世界57カ国・地域と交流をもち、2003年までに14,290人を派遣、8,170人を受け入れてきました。



AFSネッワークに参加している国・地域

かつてAFSネッワークに参加していた国・地域

国名 受入 派遣

日本と交流してきた国・地域
数字は1954-2003年の留学生数

AFSの現場から— 地域支部の活動

多くの人々のネットワークと熱い想いに支えられて

受け入れ家庭を探す

ボランティアの国際教育交流団体としてのAFSの本領が発揮されるのは、活動現場である全国67の地域支部でしょう。支部活動の中心となるのは「留学生受け入れ」で、そのために支部が存在するともいえます。

全国で長期、短期あわせて400人ちかい留学生を受け入れるために、まずは受け入れ家庭、学校探しから始まります。新聞で募集し、学校に依頼し、多くは口コミで受け入れ家庭を探しますが、ボランティアで外国からの高校生を受け入れるホストファミリーの希望が少ないのが悩みの種です。かならず家庭を訪問してAFSの趣旨を理解していただき、ホストファミリーをお願いします。留学生は人間としてまだまだ「未完成な子供」であり、経済面も含めて負担も苦労もあるけれど、家族として一緒に暮らすなかで相互理解の大切さを学びあい、究極的には「世界平和のための種をまく活動」ととらえて、私たちと一緒にやってくださいとお願いします。

受け入れ校を探す

留学生にとってもうひとつの異文化体験の場が日本の学校です。進学指導で手いっぱい、受け入れ態勢がない、などの理由で留学生受け入れに消極的な学校が多いのも事実ですが、「留学生との直接の出会いが何よりの国際理解教育」と受け入れに積極的な学校もあり、物心両面での援助・協力もあります。システムの異なる日本の高校生活にとまどう留学生を、ボランティアと先生方とが連絡をとりあってサポートします。

留学生とホストファミリーの間で

「留学生や地域の人々の異文化理解に役立ちたい。日本についてたくさんのことを学び、日本語も上手になって成長した姿で無事に親もとに帰したい」そんな期待と責任感を胸に生徒を受け入れる家庭も、「勉強はしない、パソコンでゲームやメールばっかりやって、日本の文化にはぜんぜん興味を示さない」とがっかりしたり、留学生のほうも「行動に自由がない」と不満に感じたり……。言葉や習慣、考え方の違いによる壁というよりも、「日本の家族の一員として一緒に暮らす」ことからさまざまな問題が発生します。お互いの立場、考え方、気持ちについて、留学生と家庭との話し合いをとおして解決を試みます。「留学生もうちの子たちと同じ思春期の子供なんだ……」衝突と話し合いを繰り返しながら、互いの理

2003年9月12日、盛岡中央高校の国際教育フォーラムに青森、盛岡、宮城、福島、栃木、茨城の留学生および同校の姉妹校である岡山学芸館高校の留学生の18名が招待されました。昼食は盛岡名物わんこそば。宮城のブラジル人留学生が113杯で優勝。写真の３人（左から、アルゼンチン（茨城）、タイ（宮城）、ブラジル（岡山））はその次によく食べた生徒たち。南米・アジア組の圧勝でした（写真提供：茨城支部）

AFS日本協会50周年　心からお慶び申し上げます。

広告掲載

解が深まっていきます。

溝が埋まらないまま、家庭内でストレスが限界になると問題は深刻です。担当するボランティアにとってはもっとも辛く、しかも決して逃げられない場面です。途方にくれて眠れない夜もあります。決裂も覚悟して、話し合いの場に立ち会います。一生懸命に取り組んだ家庭には申し訳なく、留学生に対しては「ここで帰すわけにはいかない」と責任を感じながら、その話し合い抜きに次へ進むことはできません。相互理解をめざしてみんなで努力したのに、誤解が解けず気持ちの通じることのないまま、不本意な結果になる場合もあります。

「いったい何が問題だったのだろうか？」支部の仲間との話し合いのなかで、異文化理解や人間関係づくりの難しさ、家庭のありよう、子供たちを囲む社会環境の問題など、さまざまな要因が話題となり、善意をよりどころにしたAFS生受け入れの現実の困難さをあらためて実感するときです。

ボランティアのやりがい

支部のアルバムには留学生を真ん中にさまざまな活動の思い出が記録されています。ボランティアに残るのは、留学生やホストファミリーと共有した喜び、苦しみ、悲しみ、失望、怒り……そういう想いです。苦労してなんとか1年を全うさせた、いわゆる問題児だった留学生のほうがすぐに脳裡に浮かぶのも、また不思議なことです。

ホストファミリー不足、資金不足、スタッフ不足……ほとんどの支部が抱える慢性的な問題です。ボランティア個々人には、さらにAFS活動と自分の家庭や仕事との両立という大きな壁があります。家族の理解なしに、この活動は成り立ちません。家庭生活や仕事をときには犠牲にし、労力負担ばかりでなく自腹まで切って、それでもコツコツと草の根のAFS活動をつづける多くのボランティアが全国にいます。一つひとつの仕事をこなしながら、困難だからこそやりがいもあり、国籍や世代を超えたさまざまな人々と交流するなかで自分の世界が広がる、刺激的で何かを学べる貴重な活動でもあるのです。「自分なりに成長したと思う」と言って帰国する留学生。「大変だったけど学ぶことも多かった。外国に子供ができて幸せ」「ばんざい！　終わったァ！」と見送りながら、安堵感とともに笑顔で涙するホストファミリー。「ありがとう。お世話になりました。すばらしい仕事ですね、ぜひつづけてください」こんな言葉が次へと向かうエネルギーとなっています。　（小池 泰子、船田 千絵、堀越 悦子）

広告掲載

私のAFS体験

ひとりのAFS体験が、それにかかわった人たちに及ぼす影響は決して小さくありません。それぞれの人が、それぞれのやり方で考え、気づき、学んでいます。より広く、より深く・・・私たちの歩みはつづきます。AFS体験とその後の人生を、それぞれの立場で語っていただきました。

A Family Story

ジェフ・ピーターズ
（ニュージーランド）

13歳のときに我が家にアメリカからのAFS生がやってきたことが「2代目AFSファミリー」の生活に大きく貢献しています。2回の年間受け入れや、楽しかった支部活動が応募の動機です。当初、南米に行きたいと考えていた私に「日本も視野に入れたらどうか」と父からのアドバイスがあり、結果的に私の人生に大きな影響を及ぼすこととなりました。1984年に富山県でホストファミリーやAFS関係者にお世話になり、それが日本への愛着につながりました。ニュージーランドへ帰国後、両親のAFS活動を手伝うなかで、日本から留学していた直美（妻）に出会い、89年に再来日。結婚して、現在、8歳と5歳の息子たちと、ここ日本の地で「AFSファミリー生活」を送っています。埼玉県草加市役所の公務員として、外国籍市民のための生活支援にかかわる政策立案の仕事をしながら、AFS東京支部でのLP活動や、AFS事務局の資料の見直しなど、これまでにAFSをとおして得たものを直接仕事やAFS活動に生かせることが、私にとって何よりの喜びです。年間生の受け入れというAFSとの出会いからはや25年、これからも「2代目AFSファミリー」として楽しい活動をつづけていきたいと思っています。

AFSに出会えて本当に良かった

ボロル・ドルジゴトブ（モンゴル）

モンゴルからの1期生として、はじめて来日したのは今から13年前の夏。小さい頃から憧れていた日本という国に行ってみたい、日本語が上手になりたいというのが留学のきっかけであった。成田空港に到着したときの緊張感、代々木のオリンピックセンターでの楽しい日々、日本語ソニースクールのやさしい先生たち、御殿場キャンプで出会ったすてきな友達をいまだに覚えている。そして私の「心の宝」となった出来事は、日本の家族との出会いであった。AFSのおかげですばらしい家庭に出会い、その一員として受け入れてもらい、たくさんのやさしさと愛情をもらった。これからも、今までどおりに、その心の絆を大切にしていきたい。AFSの体験を得て、当時16歳の私は、それまで気づいていなかったいろいろな大事なことに気づき始めたように思う。それは、人間というものは、互いに力を合わせてこそ生きていけるのだということ、また、言葉が通じなくても心が通じるのだということである。私は「AFS生で本当に良かった！」と思う。このすばらしい体験をモンゴルのもっと多くの子どもたちに実現させてあげたい、そのために私はできる限りのことをやっていきたいと思う。

AFS日本協会50周年　心からお慶び申し上げます。

広告掲載

アメリカに憧れて

亀田 紀子（帰国生・アメリカ）

もう半世紀も前のことなのに、ニッキの味がする赤いデンティーン(Dentyne)のチューインガムを生まれてはじめてかんだときの「驚き」を鮮明に覚えている。私の最初の「アメリカ体験」であった。小学生だった私には米国がキラキラ輝いた国に思えた。「アメリカへ行ってみたい！」この夢がAFSによってかなえられた。私はケンタッキーの小さな町に最初のAFS生として送られ、否応なく「ひとり立ち」の環境に置かれた。高校生の私はその体験がその後の人生の「原点」になるとはみじんも想像していなかった。大学、大学院と米国で学び、夫も米国人を選んだ。そして30年近く、私は「日本人」として米国を拠点に仕事を続けてきた。AFSバス旅行の最後にケネディ大統領のスピーチを聞いたときがピークだった米国の輝きは、最近ではアメリカ覇権の傲慢さがもたらした混沌をみて不安に転じている。頼みは次の世代。「AFS体験」を基盤に40年間修得してきたことを日米の若者に伝えようと、現在は米国の大学でMBA学生にアジア諸国のビジネスを見聞してもらう研修旅行を企画・担当し、グローバルマネジメントを教えている。また日本でも「ひとり立ち」したキャリアの築き方、起業の仕方などについて話して回っている。

留学生はやさしさを問う鏡

金田 利里子（ホストファミリー・金沢支部）

やさしいこと、けなげなことをすると花が咲くという「花さき山」をご存知ですか？ 留学生が孤独に耐えたとき、赤い花が、悲しみを乗り越えたとき、つゆをのせた青い花が咲きます。この花の数だけ留学生はたくましく成長し、留学生を励まし続けます。しかし最近のインターネットの普及は、留学生が孤独でいる時間、孤独でいる機会を奪いました。地球は小さくなり留学生は母国を、家族をひきずる状況が増えました。それでも10代後半にひとり異文化世界に飛び込み、同化し、また自国の文化に戻る作業は素晴らしい体験だと思います。ホストファミリーにとっても留学生は自分のなかにあるやさしさ、けなげさを問う鏡に、自国や他国の文化に対する自分の思いを映す鏡にもなります。そしてそれが世界平和へとつながるならそれはなんと素晴らしいことでしょう！

生かされ、支えられて

高味 修一（派遣生保護者）

高校留学を体験したわが家の子どもたち。長女（ボリビア）、次女（独）、長男（米）と派遣先は異なるが、一様に自立心（親ばなれ）をつよめて帰国した。親もいくらかのさみしさとひきかえに自立心（子ばなれ）を養った。ホストファミリーとは、メールや手紙などを通じて家族ぐるみの交流が体験でき、得るところが大きかった。現在、長女は大学で中南米の研究をしつつAFS学生部活動に励んでいる。次女は交換留学生としてドイツの大学で学んでいる。長男はアメリカの大学への進学を考えている。ホストファミリー、学友、AFSスタッフが彼らの人生に与えた影響は実に大きい。なにより「生かされ、支えられている」ことに感謝できる人間に育っていることがうれしい（というわけで、今次男が応募中）。米軍のイラク攻撃が始まったとき、当時小６の三女が言った。「ブッシュさんだって、イラクに友だちがいたら攻撃しないよね」。留学運動は平和運動、という理念に沿う彼らの草の根交流が、世界平和の建設という大きな事業の一翼を担っていることを誇りに思う。

高校留学のパイオニア

平野 正彦（ホストスクール・捜真女学校）

21年前、自分自身がAFS体験をしたことが、いま、学校の留学生担当として、まさに血となり肉となっています。中学生・高校生の留学はいかにあるべきか、私たちの学校で異文化理解教育を考える際には、いつも、自分自身のAFS体験を原点に考えている私がいます。ヨーロッパからアジアから、さまざまな国から生徒がやってきますが、とりたてて留学生だからといって特別扱いはしないようにしています。留学生がいるのが当たり前の高校でありたいのです。留学生はできるだけ通常のクラスに出席します。タイの留学生の真面目な態度は生徒や先生たちに大きな印象を与えました。文化祭で修学旅行で、クラスの生徒にすっかりとけ込んだ留学生がいます。帰国した後も友達とメールの交換が続いている留学生がいます。中高生を送り出し、受け入れるという経験を通し、AFSという団体の理念の堅固さと、かかわるボランティア・職員すべての方々の層の厚さと熱心さを強く感じます。ひとりの生徒を、将来の平和の担い手としてだいじに育てていくAFSがあるのです。

緒方　貞子氏

50周年記念式典で緒方貞子氏の記念講演があります

いま国際舞台で最も輝いている日本人はだれかと問われれば、多くの人が迷わず緒方貞子さんの名前をあげるに違いない。国連難民高等弁務官（UNHCR）を10年間にわたって務め、国際社会における日本の人的貢献の象徴のような存在となった。アフリカ、旧ユーゴ、中東など、難民のいる地域で緒方さんが足跡を残さなかったところはないはずだ。

「グローバル化が進む世界で、一国の安定と繁栄は他国の安定と繁栄なしには達成できない。国際協力は日本の国際関係の支柱であり、日本の国益は相互依存の中でのみ追求できる」が持論。UNHCRを離れてからも、世界で厳しい現実にさらされている弱い立場の人々に注ぐまなざしは変わらない。

その知性と豊富な経験を買われて「人間の安全保障委員会」の共同議長となり、ノーベル経済学賞のアマルティア・セン氏とともに「安全保障の今日的課題」という報告書にまとめてアナン国連事務総長に提出した。それと並行して、アフガニスタンの復興支援会議日本政府特別代表としても復興計画のとりまとめに力を尽くし、さらに、「国際協力事業団」が独立行政法人「国際協力機構」（JICA）として衣替えすると同時にその初代理事長に迎えられた。紛争地を駆け巡った自らの体験をもとに、JICAでも「現場主義」を掲げて、現場での人々との交流を大切にするよう職員の意識改革を迫っている。

加えて、アナン事務総長の求めで「国連有識者ハイレベル委員会」の一員として、21世紀にふさわしい国連の姿をさぐる作業にも携わっている。

緒方さんが若者によく贈る言葉は「絶えず好奇心をもつて欲しい」。グローバル化の時代に背を向ける「内向き」日本を変えることができるのは、多様な世界、多様な文化に旺盛な好奇心を向ける若者しかない、との思いからだろう。

（野村 彰男）

50周年記念イベントのご案内

10月10日（日）　横浜 大さん橋ホールにて
【後援：文部科学省、外務省、横浜市】

❖記念式典　午後1時～3時半（開場12時半より）
会　場：大さん橋ホール
来　賓：第二次世界大戦時AFSドライバー、文部科学省代表、横浜市長、ほか
内　容：式典、記念講演（緒方貞子氏）、出航式
参加費：無料
募集人数：1,000名（申し込み先着順）

❖記念フェア　午後3時半～6時
会　場：大さん橋国際客船ターミナル、氷川丸
内　容：AFSの歴史展示、氷川丸特別見学ツアー、来日中の留学生による各国文化紹介、AFS友の会主催バザーなど
参加費：無料

❖記念ディナー　午後6時～9時（受付5時半より）
会　場：大さん橋ホール
内　容：立食スタイルのブッフェディナー
参加費：7,000円または10,000円（50周年奨学金寄付3,000円含む）
定　員：600名（申し込み先着順）

記念式典と記念ディナーには参加証が必要ですので、下記までお申し込みください。満席となった場合はご容赦ください。

AFS日本協会50周年記念事業記念イベント申し込み係
TEL 03-5919-1257　e-mail:50event@afs.or.jp
http://www.afs.or.jp/50a/

AFS50周年記念 パネルディスカッションのお知らせ

「若者の国際交流を考える――高校生留学の意義」

日　時：2004年11月7日（日）午後2時～4時半
場　所：浜離宮朝日ホール　小ホール
参加費：無料（先着300名）
司　会：鳥飼玖美子氏（立教大学教授）
パネリスト：国際交流関係者および元留学生
問い合わせ・申し込み：AFS日本協会50周年事務局
TEL：03-5919-1257

このパネルディスカッションの模様は11月20日（土）NHK教育テレビ夜11時30分からの「土曜フォーラム」で放映されます。

AFS日本協会50周年　心からお慶び申し上げます。

広告掲載

財務委員会よりのご報告

財務委員長　井手 秀彦

15年度決算は連結決算と大幅黒字を実現

財務面で15年度は2つの意味で画期的な1年となりました。第1に、15年度において日本協会として初めて連結決算が行われました。すなわち全国各地の支部会計と事務局会計を統合、さらに各種奨学金特別会計が一般会計に統合され、日本協会として初の連結決算が実現しました。第2に、15年度は大幅な黒字決算を達成しました。ここ数年きわめて厳しい財務状況がつづきましたが、財務基盤の改善強化をはかるため「構造改革チーム」が組織され、抜本的な対応策が検討されました。そこで作成された提言に沿って、虎ノ門から代々木へ事務所を移転、それによる家賃の削減、さらに職員数の削減や賞与カットなどによる人件費削減、きめ細かい事業運営経費の管理などを着実に実施しました。その結果、日本協会事務局単独で2,000万円を上回る黒字決算を実現しました（事務局単体ベースの当初予算は約900万円の赤字予算でした）。この間の関係者のご努力とご協力に敬意を表しますとともに、厚くお礼を申し上げます。

16年度の課題と財務委員会活動方針

15年度はこれまでの赤字基調から黒字決算に転じ、ひとまず苦境を脱したといえましょう。しかしこの黒字を定着させ、長期的に安定した財務基盤を構築することは、日本協会にとって財務上の最大の課題であります。その観点から16年度は派遣留学生の参加費改定、事務局職員の給与水準の見直し、その他事業経費の抑制運営などの施策を実施し、引きつづき一層の収支改善に取り組む方針です。さらに15年度に成果をあげた寄付の多様化を推進していきます。今年は日本協会設立50周年の節目の年にあたります。次の半世紀に向け、ゆるぎない日本協会の基盤づくりを目指して、財務委員会活動に取り組んでいきたいと思います。

事務局より

ホストファミリー募集

2005年度年間プログラム受入生のホストファミリーを募集しています。留学生をご家族の一員としてお迎えいただける方、異文化交流に興味がおありの方、ぜひ最寄りの地域事務所までお問い合わせください。
【受入期間：2005年3月～2006年2月（約11ヶ月）】

お問合せ・資料請求先

東日本事務所	Tel：03-3357-5831　Fax:03-3357-5841 E-mail:info-east@afs.or.jp
名古屋事務所	Tel:052-807-7338　Fax:052-807-7349 E-mail:info-nagoya@afs.or.jp
大阪事務所	Tel:06-6317-3955　Fax:06-6317-3977 E-mail:info-osaka@afs.or.jp
福岡事務所	Tel:092-821-2005　Fax:092-821-2012 E-mail:info-fukuoka@afs.or.jp

自動引落しをご登録の方へ

次回引き落とし日をお知らせします。（お問い合わせ先：経理 TEL03-3357-5832）

ＡＦＳ日本協会奨学金	１２月２７日（月）
終身会費	同　上
ボランティア奨学金	１月５日（水）

米国ニューヨークに在住の帰国生の方へ

メーリングリストを立ち上げました。参加ご希望の方はご連絡ください。

（上西　wenishi@hotmail.com）

編集後記

突然50周年記念号の編集をおおせつかり、右往左往しながら、多くの方の協力を得てどうにか発行にこぎつけました。古い写真を見ては昔を思い出し、同時にAFSの現状にいかに疎かったかを自覚させられる日々でした。日ごろ貢献度の低い帰国生としては、組織としてさまざまな問題をかかえながらも各地で活動されているボランティアの皆様に、ひたすら敬意を表するしだいです。（嶋田）

AFS copyright is reproduced with the permission of AFS Archives/Communications (©2004) AFS Intercultural Programs, Inc.

編集　河野淳子　嶋田みどり　鈴木百合子　最上沙紀子
アートディレクション&デザイン　山本義明（goldfish design）

広告掲載